

平成 28 年度プリプレス研究会研究例会印象記

中 嶋 敬 信*

Takanobu NAKAJIMA*

(一社)日本印刷学会技術委員会プリプレス研究会主催による研究例会が、平成 28 年 11 月 26 日(金)にコニカミノルタジャパン(株) 浜松町ビルディングで行われた。今年度のテーマは「カラーマネージメント最前線～色を制して新たなビジネスに繋げる～」と題し、基礎から応用、最新の情報を含んだ内容について各プログラムで講演いただいた。出席者は、印刷会社、印刷関連メーカーなどの方々、約 60 名にご参加いただいた(写真 1)。



写真 1 会場風景

各プログラムの概要を以下にまとめる。

1. 色で変わる×色で変えられる広告効果

COCOLOR 代表 都外川八恵氏

感覚や感性、センスの世界だと思われがちな色の世界であるが、実はそこには明確なロジックが存在するという。すべての色には意味がありメッセージを持っているということを含め、デザインから見た色作りについて説明があった(写真 2)。どのように色を用いれば人の気持ちを変え、行動を変えられるかということ、色そのものが持つ効果や働きを利用するようにデザイナーは意図して配色やデザインを行っているとのこと、あらためて色の重要性を感じた。また、デザインにおいて色と密接な関係をもっている要素に質感があり、最近では質感



写真 2 都外川講師

表現の時代とも言われているとのことである。

2. カラーマネージメントの基礎知識

富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)

大橋 彰氏

昨今、カラーマネージメントが一般的になりつつあるが、印刷業界では色に関するトラブルを抱えながら業務を行っている。アナログ・デジタルデバイスが混在する環境で適切なカラーマネージメントを行うためには、各デバイスの色設定を行うだけでなく、求められる色精度に応じた日常管理が必要であることが強調されていた。製版部門の理想的な状況としては、印刷現場にとって刷り易い色見本を出すことであり、プリプレスは印刷工程のサポートを行う業務である。カラーマネージメントを行う際には、目的とゴールを定めて実施することが成功につながるとのことであった。本講演では、例としてコスト削減の事例を紹介された(写真 3)。



写真 3 大橋講師

3. Inkjet プルーフの最新技術

GMG ジャパン(株) 竹下祥文氏

インクジェットプリンタの表現力が高まり、CMYK4 色のデータであれば、印刷本機で校正をするまでもなく、カラーマネージメントシステムで管理されたインクジェットプリンタでプルーフを出力すれば、殆どはクライアントからの OK を得られる精度を維持できるよになっている。しかし、CMYK+ 特色のオーバープリント、特色+特色のオーバープリントの再現は非常に困難であった。その問題を解決するため、最新技術では CMYK・特色問わず、すべての色を分光スペクトルで管理することで対応している。一般印刷物だけでなく、特色を多く使用する紙器製品や軟包装材用途でも活用可能とのことである(写真 4)。質疑応答も活発に行われ、特色を用いた製品の Inkjet プルーフの注目度の高さを認識した。



写真 4 竹下講師

* 共同印刷(株)

(〒112-8501 東京都文京区小石川 4-14-12)

4. 包装材におけるカラーコミュニケーションと特色の色管理

ビデオジェット・エックスライト (株) 岡松英二氏

商業印刷の分野では標準化が進み、カラーマネジメントの浸透により数値による色管理手法が利用されているが、包装印刷の世界では基材のタイプや印刷方式の種類が多いことや、特色が使用されるケースが多いことなどの理由により数値による色管理が遅れており、目視による管理が一般的である。そこで、基材、印刷方式、特色別に基準となる数値をデータベース化し、それをクラウド上で参照する手法と、その数値管理方法の紹介を行った(写真5)。現物やカラーパッチでなくデータベースにより基準とすることで、見た目ではなく数値を絶対として色を管理するという方法が用いられてきているということに驚いた。



写真5 岡松講師

5. ソフトプルーフの最新動向

EIZO (株) 山口省一氏

ソフトプルーフ(モニタープルーフ)についての講演は数年前にも実施しており、現状までの進捗や2015年に発行された最新のISOについての紹介が行われた(写真6)。冒頭、前回講演時の聴講者の確認を行ったが多くが今回初聴講であり、カラーマネジメントに

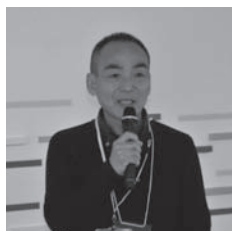


写真6 山口講師

関わる人材の参加者の入れ替わりが行われていることを認識した。キャリブレーションされた適切なモニターを用いてプルーフシステムが正しく設定されなければソフトプルーフは実現されないとのことである。ソフトプルーフは印刷物以外にもデジタルサイネージ、3DCG等といったコンテンツのマルチユースによる多様化したメディア間のカラーマネジメントに関しても有効であるとのことである。

6. デジタル印刷機における色再現技術の最新動向

(株) バリューマシンインターナショナル 宮本泰夫氏

近年のデジタル印刷機は2極化の傾向が強く、大型/高速化でオフセット市場への参入か、小型/高付加価値化による差別化となっている。高付加価値化においては、特色を採用している機械が多く、色域拡大用のオレンジ・グリーンや加飾/アイキャッチ用のニスや蛍光色等がある。色域拡大の製品としては、4色機であるが高彩度トナーを用いることで実現している機械もある。通常のCMYK印刷を行う場合は、カラーマネジメントを実施し対応するとのことである。ニスや蛍光色は色だけでなく、質感も表現するためのものであり、質感表現の時代に狙いを定めた製品ではないかと考えた。デジタル印刷の多色化は、多様な用途や商材が想定される高付加価値化へのステップであり、新たなアプリケーションへのチャレンジと見ることが出来るとのことであった(写真7)。



写真7 宮本講師